

高野素十作品二百句抄

倉田紘文

はじめに

ウェブサイト『ゴスペル俳句』に於いて、秀句合評の学びをしている。あらかじめ決められた教材を元に会員の有志がそれぞれ作品を鑑賞し、感じ得たポイントを互いに共有し合うことで、より効率的に学ぶことが出来る。この書はそのテキストとして高野素十作品二百句を収めたものである。

文字づらだけを見て我流に鑑賞していたのでは学びにつなげることはできない。季語を調べ、言葉を調べたりと十分な予習をした上で「客観写生に包み隠された作者の本当の思いを探る」これが本物の鑑賞だと思う。

俳句鑑賞は独学よりも合評のほうが楽しく学ぶことができる。学びの浅い人は、経験ある人の見識を吸収することで速く成長できるからである。一方ある程度の知識をもつ人は、自分の感覚に固執し他の意見を受け入れないという傾向に陥りやすいので、初心者意見にも敬虔に耳を傾け、常に初心忘るべからずの謙虚さをもって協力してほしい。後進を育てるために労することは、自分を育ててくれた先人に対する恩返しだからである。

令和三年十二月二四日

やまだみ のる

『初鴉』抄

秋風やくわらんと鳴りし幡の鈴

夕鴨や二つ三つづゝ水尾明り

夜振の火くゞり出でたる小門かな

ひるがへる葉に沈みたる牡丹かな

子の中の愛憎淋し天花粉

真白に行手うづめて山辛夷

夜の色に沈みゆくなり大牡丹

流燈に下りくる霧の見ゆるかな

水尾ひいて離るゝ一つ浮寝鳥

春水や蛇籠の目から源五郎

老幹の横たはるあり夜の梅

妻つれて兵曹長や花ぐもり

打水や萩より落ちし子かまきり

露けさや月のうつれる革蒲団

蓼の花豊の落穂のかゝりたる

漂へる手袋のある運河かな

柊の花一本の香りかな

ひざまづき蓬の中に摘みにけり

弘法寺の坂下り来れば鶏合

花冷えの闇にあらはれ篝守

朴の花暫くありて風渡る

蟻地獄松風を聞くばかりなり

水馬流るゝ黄楊の花を追ふ

方丈の大庇より春の蝶

塵とりに凌霄の花と塵すこし

草の戸を立ち出づるより道をしへ

菊の香の夜の扉に合掌す

まつすぐの道に出でけり秋の暮

翠黛の時雨いよいよはなやかに

また一人遠くの芦を刈りはじむ

摘草の人また立ちて歩きけり

鴨渡る明らかにもまた明らかに

ある寺の障子ほそめに花御堂

松 蝉 や 二 つ 三 つ づ づ 鳴 き 揃 ふ

揚 羽 蝶 お い ら ん 草 に ぶ ら 下 る

真 青 な 葉 も 二 三 枚 帰 り 花

朝顔の双葉のどこか濡れるたる

風吹いて蝶々迅く飛びにけり

甘草の芽のとびとびのひとならび

生涯にまはり燈籠の匂一つ

大いなる蒲の穂わたの通るなり

猫柳四五歩離れて暮れてをり

探梅や枝のさきなる梅の花

ゆれ合へる甘茶の杓をとりにつけり

放屁虫あとしざりにも歩むかな

夕月に甚だ長し
馭者の鞭

翹わつててんとう虫の飛びいづる

雪片のつれ立ちてくる深空かな

野に出れば人みなやさし桃の花

柳絮とぶ道の真中に立ちて見る

来る人に灯影ふとある雁木かな

小をんなの髪に大きな春の雪

ひなげしの花びらを吹きかむりたる

桔梗の花の中よりくもの糸

菊つみてはや盛り上がる籠の中

歩み来し人麦踏をはじめけり

春月や畑の蕪盗まれし

囀鴨雌をつゝきぬ悲しけれ

親馬は梳らるゝ仔馬跳び

桃青し赤きところの少しあり

づかづかと来て踊り子にさゝやける

毛見のあとより一人出て先に立つ

雁の棹枯木の上に一文字

ばらならに飛んで向かふへ初鴉

櫓の高みを越えて行きしあと

大櫓をかへせば裏は一面火

くもの糸一すぢよぎる百合の前

家小さく木犀の香の大いなる

縷ひ上ぐる縄を頭の上までも

春月や室生寺の僧ふところ手

ひつぱれる糸まつすぐや甲虫

食べてゐる牛の口より蓼の花

もちの木の上の冬日に力あり

田打鋤一人洗ふや一人待ち

大いなる種井まはりて人来る

鴨打の家の女房子を抱く

百姓の血筋の吾に麦青む

春塵や観世音寺の観世音

三日月の沈む弥彦の裏は海

芦刈の天を仰いで梳る

黄楊の雪大きく割れてゐたるかな

百千鳥堂塔いまだ整はず

雁の声のしばらく空に満ち

耕牛について或は身を反らし

花蓑忌一人修してなつかしき

枯蔓に雪柔かにひつかゝり

代馬の泥の鞭あと一二本

『雪片』抄

春の月ありしところに梅雨の月

冬山に吉野拾遺をのこしたる

冬波の百千万の皆起伏

霧の谷何も見えざる大いさよ

自動車のとまりしところ冬の山

月の客或時は又萩の客

いく度の大
火の草津盛衰記

大原女の
大矢絣に更衣

玉解いて
即ち高き芭蕉かな

紫の袷袖口濃紫

階の下に群がる芝火かな

ははそはの母にすすむる寝正月

一本のあたりに木なき大冬木

欠航というも冬めくものうち

元日は大吹雪とや潔し

その寺につきたる時の夕牡丹

ふるさとを同うしたる秋天下

『野花集』抄

麦焼きの女の胸のあたりの火

大久住眠る麓の今日の宿

雪明り一切経を蔵したる

僧死してのこりたるもの一炉かな

湖のほとりの雪間ひろびろと

残雪に朝朝雪の少しづつ

美しき春潮の航一時間

空をゆく一とかたまりの花吹雪

盆経といふは斯く斯く斯く斯くと

えぞにうの北海道に百姓す

国貧し大学貧し卒業す

たんぽぽのサラダの話野の話

片栗の
一つの
花の
花盛
り

大梅
雨の
茫茫
と沼
らし
きも
の

『桐の葉』抄

夫唱婦随 婦唱夫随 や冬籠

割れて二つ二つに水の月

本山の苗代寒に鐘をつく

短夜の寺の浴みの二人づゝ

七種のはじめの芹ぞめでたけれ

定まりし一つの心日脚のぶ

『芹』抄

別るる日てんとう虫のとびたる日

端居して戒壇院に女あり

尼さまの月の盃のせたる手

日論の上を流るる冬の水

耕牛の一步一步の見守られ

湖の上の一炊煙や明易し

三人の斜めの顔や祭笛

たらたらと星流れたる網戸かな

かたまりて通る霧あり霧の中

枯枝のひつかかりる枯木かな

稲光きくきくきくと長かりし

月明の手のひら萩の一枝のせ

秋桑にとぶものは山鳥かな

彼蓮の茎の集まりあるところ

何となく月の空ある庵かな

冬の日
のしばらく照らす
我身かな

盃を重ねて
いよゝ花夕べ

水広き故の
あやめの返り花

落柿舎の二つの床几春の風

花びらを流るゝ雨や花菖蒲

日々の是好日や秋茄子

月の王みまかりしより国亡ぶ

混血の国のペルーの秋日かな

稲妻にインカの民は灯さず

インカの子虹に向かつて石を打つ

黒き髪黒き眼もちて夏木かげ

黒人の子の黒人や秋の風

夏雲の下ミナス州ゴヤス州

月の空南に南十字星

身辺にももの少き大暑かな

春雨や少し太りし
算水

月涼し長方形も亦涼し

我去れば沛然と喜雨到るべし

書初めのうるのおくやまけふこえて

みちのくの短き夏の日の盛り

一といふ字人といふ字や筆始め

歸去來はわが心にも夏の蝶

短日の海あることのやゝ淋し

第一義浮葉即ち平らかに

あすしらぬみむろのやまの春を待つ

四五人の僧の仰げる春の空

秋晴のみち遠かりし然れども

仲秋の太玉串を奉る

雲と月ありていよいよ明るさよ

墓一基ある時は月よかるべし

大いなる春といふもの来るべし

何につながれ何にもつれむ明易し

暑き日の暑きところに四月堂

まつすぐに一をひくなる夏書かな

秋風のこれは楢なり柳なり

下り築一奔流のたのもしき

冬の日
の美
しかりし
不言

藺帽子の
主の曰く
万事了

夏の人
空手来たり
て空手去る

復刊『芹』抄

月明の一人にして世に處せん

寒の空日々の日のありどころ

雪国の雪美しと女住む

夏襟となりて面目一新す

しめてある二枚の障子新しき

春水の平らか心平らかに

春昼のみ仏に人現はるゝ

ばらの虻響きをたてゝ我にとぶ

雨だれの棒の如しや秋の雨

悉く繭となりたる静けさよ

春風に家を出でたる数歩かな

桑庫のがらんとしたる二人かな

一日の行夏川を見て戻る

帷子の膝うすうすと我身かな

立待の月の芒の正しさよ

袂にもとまりて螢放ちの夜

右にとけ左にとけて花芒

蝌蚪二三をりをり水の深きより

寺清浄僧等清浄夏めきぬ

天の川西へ流れてとゞまらず

わが星のいづくにあるや天の川

蠐螬のとぶ蠐螬をうしろに見

高野素十論（抄） 倉田紘文

高野素十の処女句集『初鴉』の序に高浜虚子は、

「夙に出づべきはずであって出なかつたのが、素十君の句集である」「磁石が鉄を吸ふ如く自然は素十君の胸に飛び込んで来る。素十君は画然としてそれを描く。文字の無駄がなく、筆を使うことが少なく、それでゐて筆意は確かである。句に光がある。これは人としての光であろう」

と書いている。この讃辞の通りに、『初鴉』の刊行は遅く、昭和二十二年九月である。昭和初頭の俳壇で活躍をした四Sのうち、水原秋桜子『葛飾』（昭和五年刊）、阿波野

青畝『万両』（昭和六年刊）、山口誓子『凍港』（昭和七年刊）の処女句集出版と比べれば、そこに素十の自己発揚のない人柄を見ることが出来る。

その素十の句に対しての虚子の評価を更に詳しく述べたものに、「秋桜子と素十」（昭和三年十一月「ホトトギス」）がある。

「厳密なる意味に於ける写生といふ言葉は、素十の句の如きに当てはまるのだといえる。素十は心を空しくして自然に対する。自然は何等特別の装いをしないで素十の目の前に現れる。自然は雑駁であるが素十の秀明な頭はその雑駁な自然の中から或る景色を引き来たって、そこに一片の詩の天地を構成する。それが非常に敏感であって、かくて出来上がった句は、秋桜子の空想画、理想画というような趣はなく、何れも現

実の世界に存在している景色であるということを強く認めしめる力がある。即ち、真実性が強い」

この強力なる虚子の推挽の意に叶うものとして次の句があげられる。

朝顔の双葉のどこか濡れゐたる

この句は昭和四年の作。「私が俳句に入ってから、とにかく客観写生と云うことを志して、ただ物を精密に：目や耳を通して精密に：観察しようとして歩いた」「修業の道としては初めから大作などを描こうという気を起こさずに、先ず一木一草一鳥一虫を正確に見るといふことが必要」……これが当時の素十の俳句に対する処し方であった。

(後略)

『高野素十作品二百句抄』 倉田紘文

令和三年十二月二四日 印刷

令和三年十二月二四日 発行